

北九州市の文化財を守る会

会報

No.5 47. 11.1

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉区城内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389

次においた中期の会報は紙数十五枚であるが表紙に「茶会記五」として花押が書かれている。この書体は本文といささか違うので後日表紙を加えてとじかえられたとき書かれたのである。本文の書き出しでは年号は不明で十二月十日の夜の茶事から始まっている。しかし、この会報が江戸中期ころのものであることは、この会出席者の中に、養拙齋のがしばしば書かれていることよって明かである。養拙齋は、小笠原忠雄公の時代の家老職の一人であった小笠原権左衛門長成のことである。この人は、肥後細川藩士溝口自見という人の末子で、小倉藩家老職の小笠原長賢の養子となつた人で在職当時から世に知られた茶人の一人であった。その所持していた茶具諸品の目録ともいふべき「茶物品類」の一冊は今も、茶道頭を勤めた古市家の文書の中にのこっている。また、千家の宗匠の一人で有名な表千家の覚々齋と交友の深かったことは古市家の「覚書」よって知ることが出来る。また、狹生徂徠との交友については徂徠



清風軒

齋の師浦野一步光諱と並び称された武術家である。この景純は豊前中津の出身で、学は伊藤仁斎について宋学を学び、剣は当代無双の一人と称された無眠流の祖三浦源右衛門政為に学んだ。享保の四年（一七一九年）唐船が小倉の沖に出没したとき、筆談を以て、唐船を追い返したのはこの景純である。栄伯、景純のこの二人の武道家が小倉藩に仕えた時代は二代忠雄公の頃で、家老職には小笠原権左衛門長成が在任していたことは見のがしがたい事実である。

(美和弥之助)

ことしの春から夏にかけて私は二つの会記資料を、松崎武俊氏からご恵贈いただいた。最初頂いた一冊は江戸末期のもので、今一つは中期の記録である。江戸末期の記録は表紙に、「成茶事記、守拙」としたためられている。紙数は三十一枚で、書き出しは文政九年の正月十日甘分亭の茶事に始まって、同年の十二月朔日甘古亭の茶事で終っている。この記録に興味のあることは、古市自得齋が不羨の号で、記録されていることである。この一冊が小倉城下での茶事記であることは、ここに現れてくる客の顔振れを、古市家の清風軒会記と照合してみると明らかにわかる。また、この記録を通して小倉城下に今まで、われわれが気付かなかつた松月軒、甘分亭、休羨亭、守拙亭、壺隠亭等の茶室のあったことも知るこ

集の十三に、「豊公族大夫養拙齋二亭記」よって世に広く知られているところである。この二亭というのは、「臨江」「忘言」の二亭を指していることは申すまでもないことであるが、この二亭は、かつて小倉城の東、赤坂の鳥越（一名武蔵山と言ふ）の八丁越の頂上左側山中に在った。現在のこの辺りは住宅地に拓かれて昔の面影をとどめておらぬことは残念である。この八丁越は小倉城の方からみると鳥越の右、即ち山側に通じた道で、これに対して左側、即ち海側に通じた道が冷水越と呼ばれていた。このことは、鳥越の下に建てられていた道しるべよって明らかであった。この二亭の記は長文のものであるが私の記憶にあやまりがなければ「小倉市誌」にも収録されていたかと思う。また、前述の会記の中には、養拙齋の茶室として光風亭というのがあったこともしるされている。またこの他に、この会記に高又として、藩の槍術師範高田又兵衛栄伯が出席していたことが示されていることも興味深いことである。栄伯はご存知のように宝蔵院流高田派の二代でこの人も茶を好んだとみえて古市家にのこる元禄ころの会記の中にも現れてくる。この高田栄伯の他に今一人小倉藩の代表的武人で、古市家の享保会記に名をとどめている人物に木村源之丞景純がいる。この人は宝永六年（一七〇九年）小倉藩に、剣術師兼侍講として召抱えられた人で、直方円

茶事記二題

をきよう教わったんだ、と幾度もくり返し思った。野面の盆踊りを見るために、石垣の間の細い暗い道をバスの方々とたどって行く時は、もう最初の不安はなかった。そして初めて顔を合わせ言葉も交わしていない方々に、ちよつぱり親しさのような気持ちさえ持ちはじめている自分に気が付いていた。遠くから道中三味線の音がにぎやかに近づいて来ると、私の胸はどきどきとおどった。実に楽しかった。ほめ言葉や返し言葉の面白さに、つい笑っていた。鳥追笠の踊りさんたちの手振りには明るく、扇子の優雅な動きと珍らしさに見とれていた。「仕方舞？の流れかな。歌詞と動作がよく合って...説明はいるまい」と先生も楽しそうに笑っていた。高台の古い建物の公民館の庭先で冷たい麦茶のサービスを受け、次の庭先に繰り込んで行く踊りの列を見ながら、ここでもまた目立たない素朴な戦いをつづけている一団の人びとに逢つたのだと胸の中で言い聞かせていた。木屋瀬の町は一度来たことがあった。グループの市中ハイクで、直方の石炭記念館と資料館と笹田焼窯元とつないだことがあった。中学の社会科でも宿場町として少し習ったことがあった。夜の宿場町は、裏道に一步入ると、もう車の音もせず、軒先のたたずまいも

むかしのままの感じがした。暗い道路の両端に宿場提灯や常夜灯のような、大きな四角い灯がともり、それを大きく輪が囲んで動いて行く。「奴っこさん」の踊りは勇ましく、気合いが飛び、手振りも大きく珍しかった。腰の提灯が大きくゆれ、むかしの大名行列のことなど想像しながら時間のたつのも忘れた。いつの間にか「本手」が始まっていた。「女の人たちの先頭の二人に注意」と先生がつづいた。優しいげな流れるような、静かな手さばき。「目の動きを...」とまた先生。実にきれいだ。ゆるやかに私の前を進んで行った。ふつと気がついた。三番目から後の人たちの動きが違うのだ。なんとなくきこえない。よく見ると前二人の年配の方の手振りを追っかけるのに一生懸命のようだ。やっぱり大変なのだあと...。もうバスの時間が来ていた。黒々とした家並と時代を忘れさせるような宿場踊りに気持ちを残しながら、激しいライトの流れの中に入らなう。二年では、先頭の二人のような本手の味は無理かな。永いキャリアがあるだろうね。これもまた、レベルを維持するのは大変だろう」と先生。

えて欲しいと思う。本当に楽しかったし、素晴らしいものを見せてもらった。(グループの仲間には、ちよつと済まないけれど)小串の時と違つたこの感動は何から来るのだろう。天籟寺には、復元のために努力と情熱を惜しまない保存会の人びとの戦いがあつたからか？野面には明るさと優雅な手振りを愛して受け継ぎ受け継ぎ、素朴に楽しんでる地区の人びとの温かさが感じられたからか。木屋瀬には、宿場町の背景と雰囲気を生かして伝統を受け継ごうとする人びとのひたむきな工夫があつたからか...。本当のところはむづかしく私にははつきりこうだと言いきることは出来ない。でも、私が今までにない感動の一夜を送つたのは事実なのだ。この感動を大切にして私は「文化財を守る会」の会員としてだけでなく、この大切なものを受継ぐべき次代の一人としてしっかりと勉強して行かねばならないと思う。

民俗資料のゆくえ

若松区 宇佐美 明

ことしの一月、八十五才の母がなくなつた。残していった手文庫の中から、なぜこんな物を大切にしていたのかと思われるようなガラクタが出て来た。たとえば明治時代の衣服の月賦販売の口上と判取帳、九州鉄道の広告、記念絵はがき、ガラス乾板の写真、時代は下つて終戦時の証紙をはった百円札、私の臍の緒(小生五十才)のおまけまでついてギッシリと入っていた。これらをつひとつ取り出して見ると、私情としての母への思い出だけではなしに、母が生きてきた時代の流れが興味深くしのばれる。そしてこのガラクタが語る八十年余りの年月が日本が近代国家への歩みを急速にたどって行った歴史であり、しかもこむずかしいものではなく庶民の歴史である。八十五才の老母はこれに歴史を語らせようとか、価値が出ようからなどと思つてとつていたのではあるまいし、これだけでは民俗資料と言ふほどのものではない。けれどもこのようなもの数多い集積の中から取捨選択し、体系的に順序立てをしたとき、ガラクタがガラクタでなくなり、価値を持つ。身近にあるものはいづれ粗末にしがちなものである。残念ながら今生きる私たちの生活にかわりのあつた有形、無形のもので、すでになくなつてしまつたものが多い。

▼「芸術の秋」「読書の秋」「スポーツの秋」「食欲の秋」などと実にたくさん「秋」があります。会員の皆さんには、どのような「秋」が訪れましたか。▼今回は、おかげさまで「文化の秋」にふさわしく、文化財保護強調週間特集号ができあがりました。原稿をお寄せいただいた方に厚くお礼申し上げます。今後も会報の充実にご協力ください。

文化財研究

小倉の善行寺文書

米津三郎

大正十一年十一月五日

輝元 沓屋小三郎殿

北九州市小倉区古船場の善行寺には三通の古文書がある。...

豊前国規矩郡内坪付之事

吉田保 御公領内

分米式拾石

一、三町 蟷田郷 杉伯州領内

分米 九石

以上三捨石

右、任御下知之旨、令支配之打渡

所、如件

永祿四年七月廿八日

井上 銀左衛門元繼

財満 新右衛門忠久

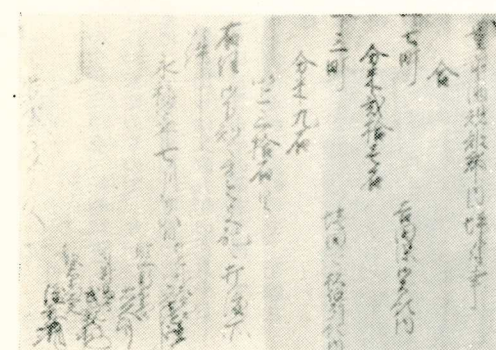
門司 対馬守武親

仁保右衛門大夫隆口

沓屋老岐守 殿

長州豊前郡之内、貞遠名三拾石地并豊前国規矩郡之内、参拾石之地之事、去永祿十年十月廿日先判之旨云、任父讓之状之旨、全可知行之状、如件

九州北部には門司、博多の港があり、大陸貿易の拠点としてこの地を手に入れ貿易の利を得ること...



進出し、一族の高橋鑑種を岩屋、宝満の城に居城させて北部九州最高司令官とする。...

鳥居について

福田安敏

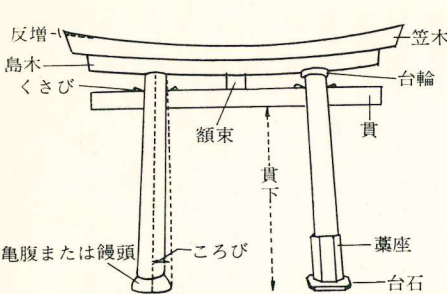
石仏、野のほとけ、石塔に関する研究書や写真集がブームのように発行されている。...

はほとんどが明神か後期八幡造りである。小倉区城内八坂神社に県指定の石鳥居がある。...

次に宇佐八幡宮の宇佐鳥居、笠木の上に檜皮ぶきの屋根をのせ額束がなく、島木と貫との間が広い。...

日本之西朝鮮之東石門表 海蛙子宮 昔者樟舟乗波順風斯降紫陽垂福無窮

四月後につくられた詩(菅家後集に載せらる) 五言 自詠 離家三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時々仰彼蒼



鳥居の各部名称

鳥居の型を見るのも面白いが、柱に刻まれた、銘文を見ていくのも面白い研究の対象となる。...

北九州市では国指定天然記念物平尾台の現況をはあくし、実際に即応した保全策をたてるために、まず本年度は同上台上の植生界の学術調査を実施することに...

平尾台植物調査

この植物調査はいままでにならな本格的な学術調査であり、四季を通じて植物の実態をつかみ地質学の分野までおよぶものです。...

文化財パトロール報告記

本会では、平尾台保護アピールをはじめ文化財愛護クラブの結成など市内文化財の保護に積極的に取り組んでいます。そこで今回は、日ごろ文化財保護をはじめ、あらゆる方面にわたって奉仕活動を続けられている本会団体「会員「滴水の会」(会長・吉村三郎)小倉区)が、九月中旬に実施した天然記念物梅花石岩層の清掃報告を寄せられましたので、ご紹介いたします。

文化財清掃のこと

小倉西高二 脇元 秀二

天然記念物「梅花石岩層」は、門司区の青浜にあった。私たちは、九月十五日の敬老の日を利用して清掃パトロールに出動した。滴水会(中学一、二年生)、富士見一トレーニンググループ(小学五、六年生)の作業二コ班を主体に高校生指揮班とそれにリーダーを合わせて総勢三十八名。すべての費用は、グループの毎日の町内廃品回収によってまかなった。およそ二時間かけてすっかり指定区域内の流木やプラスチック、ビニール、ありとあらゆるゴミ類、雑草トラック二台分をきれいに片付け焼却した。正直に言って難作業だった。私たちが、特に気をつけたことは、現状をできるだけ変えないようにすることだった。それで作業は、いっさい素手でやった。

毎日の作業訓練では海老じょう

けやガンゼキ、搔板などの道具類を使うのだが、きょうは、交通機関を利用することや現状をなるべく変えないようにしなければならぬので持ってこなかった。現場に着いて私たち皆んなが、心の中で描いていた天然記念物へのイメージは、いっぺんで吹き飛んでしまった。一時は茫然としてお互いに顔をみ合わせたことだった。なぜって……信じられないことだが……

そこは、みわたす限りの流木であり、ゴミの山であった。十年前までは、露出していたという梅花石層も今では、採石ズリと打ち上げられたガラスによってすっかり埋没して姿をかくされてしまった。私たちの眼に映っているのは、荒れ放題の単なる砂利の上の流木やゴミの山の中に小さく立っている石碑と真新しい立札のみであった。「梅花石岩層が以前この底にありましたよ」といいたいように……

そういうえば、バスから降りて歩いた白野江からの東海岸一帯の荒涼たる光景は、私たちの心に大きく穴をあけた。その空白はすべて流木とプラスチックとゴミくずとによって埋められ窒息しそうな息苦しい感じさえ受けた。遠くの山近くの山、そして岬と

いう岬は、どれもこれも発破にえぐられ、昔からの美しい緑の姿は消えうせ、眼前に曝け出されているのは、近代的採石土木工法によって削り取られた無残な姿であった。また、無気味な発破の音であり、傍苦無人に走りまわっている機械群、そのものであった。そこでは天地の理を度外視した渦が、すさまじい勢いであらゆるものを生命を巻き込み、けちらし、クラッシュの餌食にしていた。

この指定区域もまた例外ではなかった。長い長い東海岸のほんの何百分の一の猫の額ほどの指定区域も既に死にかけていた。いや、もう死んでしまっているというべきだろうか。

この梅花石に限らず、昔からの日本人の大切にしてきた貴重なものが皆、近年これと同じ運命をたどっている。私たちの属している社会では、もう一地域のこの小さな天然記念物さえも保持することが困難なのであるか。どちらを向いても公害だらけの現社会の中では「だれが悪い……」とは、明確には答えられまい。強いて答え

るならば、やれ経済大国、やれGNP世界第二位などという見せかけの経済構造、精神構造をつくりあげ何の疑問も持たず、ただその中で生きてきた私たち日本人の内在的なもの——民族的な欠陥に起因しているのではないだろうか。

大自然と人との語らいが絶えゆく今、永久にしかも何百億の予算をかけて二度と回復することのできないものを前に私たちはどうすればいいのだろうか。矛盾が大きうず巻いている。

ひとりの少年——そう、削られた山々とゴミでうずくまっている砂浜と、今はもう消えてしまった藍色の海……それらを大きくカバーする灰色の空の下で無心に釣り糸をたれている漁村(といえるかどうか?)の男の子が、哀れにまぶたに映りつつづけている。梅花石岩層、指定区域の清掃奉仕と道々出会った門司東部の海岸線を通じて、改めて私の生活の原点と、自分がきょうしたことの矛盾と滑稽とを考えさせられた。

文明とは何か?と今さら大きく振りかぶる気はないが、改めて自分自身に答えの出しようのない問いかけをしないでは済まされない

気になった。仲間たちとの作業反省会の時、「まるつきり漫画だとわかってはいる作業になぜ出動するのか」と素朴なそれでいて実に重い質問が、下級生の中から出た。各パトリーダーは、顔を見合わせて黙った。先生が「山がそこにあるから……では答えになるまいし、また意味合いも少々違うと思う。しかし、今はおまえたちがきれいにしてきたあの場所がもう気になっていないだろう。もう流木が、ゴミが、釣りの人たちが……と。

そしておまえたちは、ブスブスぼやきながらまたパトロールに出動して行くだろう。山男が山に引かれるのとは違うだろうか……強いて言えば「愛」かな!この言葉はちよつとキザっぽい……そこらでがまんしとけ。そのうちに胸の中にポイントと落ち着くよ!誰かが愛しちゃったのよ!と節をつけたので、笑いが円座の中を突きぬけた。先生は、度重なる無駄な出動の中から一人びとりがそれそれ何かつかむことを望んでいるんだなあ。と思った。

皆んなが、文化財とは何か?指定地域なのか?それとも実は失なわれてしまった自然そのものじゃなかったのか?と、大きな疑問に突き当たった事が最大の収穫と思う。

目をつむってヘリコプターにカメラを積んだつもりになれ……

文化財メモ

福岡県の「民家」緊急調査報告書

福岡県においても、近年まで、茅葺の屋根、土壁、黒光りする柱や天井等の家を、普通に見かけたものです。しかし、これらの民家は社会状況の変化につれて建て変えられたり、修理されないまま取り壊されたり、朽ち果てたりすることが多くなりました。民家はそこに住んだ庶民の日常生活を直接教えてくれる歴史上の貴重な有形資料であるばかりでなく、庶民の生活の中で、長い間に少しずつ洗練され、実用的で粉飾のない建築の本質的な美しさがあり、われわれの心を打つものを多くもっています。県教育委員会では九大工学部大田静六教授を中心としたメンバーに依頼して、県内に残る民家の緊急調査をし、報告書を刊行しました。調査対象約一〇〇件。この調査で、失われつつある生きた歴史の「民家」に対する世人の関心、民家所有者の理解を深め、古い民家の保存に役立てたいとしています。北九州市内の民家では、小倉区辻三ツ辻蔵に所在の中村一雄氏宅、若松区内小竹所在の香山清次氏宅が集録されています。(発行者 福岡県教育委員会 一五〇頁)



バスによる文化財めぐり

夏の「盆おどりめぐり」につづいて秋は若松、芦屋を訪ねます。晩秋の一日を郷土の歴史を探って有意義にすごしませんか。日時、コースなどは次のとおりです。

日 時 十一月二十六日(日) 午前十時~午後四時

集合場所 戸畑駅南口(消費者センター前)

参加資格 本会会員(団体は一団体三人まで)

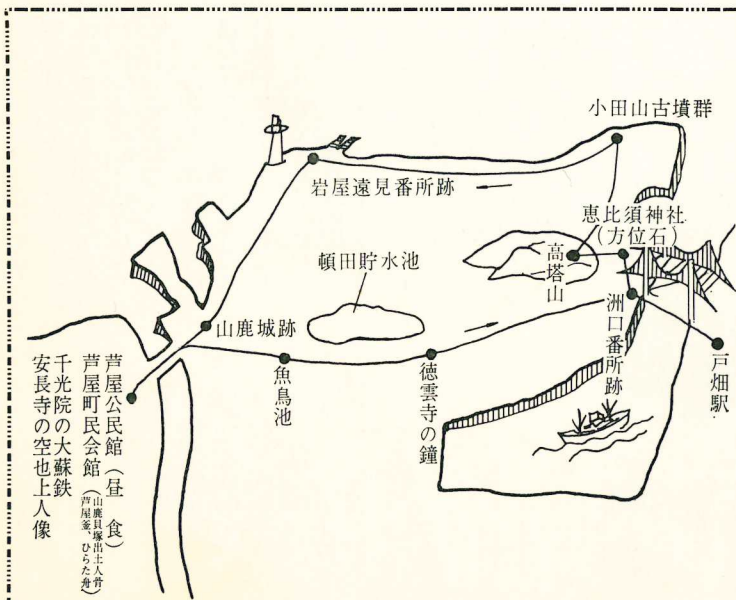
参加料 三百円

募集人員 五十人

締切日 十一月二十二日(水)

屋 食 各自ご用意してください。

申込先 北九州市小倉区城内一番一号 北九州市教育委員会文化課 電話(五八二)二三八九



芦屋公民館(昼食)
芦屋町民会館(芦屋町民会館)
千光院の大蘇鉄
安長寺の空也上人像

文化財夏期講座開催

文化財を知るには、その背景となる歴史をなぞりにすることはできません。歴史が文化財をつくり、文化財が歴史を語ってくれるのです。

そこで、今年度の文化財講座は、まず文化の夜明けである縄文時代から古墳時代まで文化の深層を系統的に学ぶことにし、北九州市教育委員会と共催で、八月二十二日から三日間、戸畑市民会館で開きました。

講義の内容は、考古学に興味をもち一応の知識をもつ人々を対象とし、講師陣も各時代の権威者をお願いしました。参加者は連日百人をこえ、熱心な講義と聴講でこの催しの目的を十分達成することができました。講座の要旨は次のとおりです。

八月二十一日

北九州の弥生時代

農耕文化の出現期について

講師 別府大学助教授

小田 富士雄

弥生文化の位置

紀元前三・四世紀ごろに開始した弥生文化は一般に稲作農耕文化に基礎をおく新米文化であるといわれている。しかしながら従来の縄文文化を追放して登場するものではなく、縄文文化が終末へと移りゆく過程のなかに弥生文化の形成条件が次々と積み重ねられていったものであった。このような近年における考古学界の成果は、大陸からいち早く文化が流入し易い環境にあった北九州から北九州にかけての縄文文化終末期から弥生文化初期の遺跡―福岡県板付遺

跡、佐賀県宇木波田具塚などの調査に負うところが大きい。

すでに縄文文化終末期までにコ

メ・紡錘車・支石墓などが流入し、やがて弥生文化初期には農耕に伴

なう大陸系磨製石器―磨製の石

斧、石鏃、石剣、石砲丁なども登

場し、稲作文化のすべての要素が

そろったのである。われわれはこ

の時期(B・C二〇〇〜三〇〇、板

付I式文化期)から弥生文化の時

代に転換したと定義づけられている。

二 北九州における弥生文化

弥生文化の研究史上に遠賀川流域

の諸遺跡が占める位置は大きい。

そして旧八幡市に在任し、最初の

遠賀川式土器を発見した故郷和羊

一郎氏の功績は考古学史上忘れ

ることのできないものである。氏

は昭和六年遠賀川流域の立屋敷か

ら弥生時代の土器を発見した。これは遠賀川式土器と言われて、日本の前期弥生式土器の総称となっている。九州から四国、中国、近畿、伊勢湾沿岸まで分布し、東限は長野県伊那谷までにおよんでいる。遠賀川式土器の波及状態から弥生文化の伝播、発展の跡をたどることが出来る。昭和一〇年代には遠賀川流域の弥生文化の研究は故中山平次郎、故森本六爾、田中幸夫、三友国五郎(元東筑高校教諭)、石村一男(元旧制八幡中學校諭)、森貞次郎、杉原莊介らの研究者によって次々と紹介されて今日の基礎をおえた。しかしながら

今日太平洋戦争以後は北九州における弥生文化研究の主流は福岡周辺にうつり、遠賀川以東の北九州地域から、周防灘沿岸地域はとりのこされた感がある。最近急激な開発攻勢に伴ってようやくこの地域にも近年の学界の成果を踏まえた組織的な調査研究の緊急性が叫ばれるようになってきた。北九州地域における弥生文化形成期の研究に重要な位置を占めるものとして小倉区長行 祇園町台地の集落遺跡、同区長行能行の石斧製造遺跡八幡区槻田小学校周辺の高槻石斧製造遺跡、同区香月町原の竪穴群遺跡などがある。この地域では弥生時代前期も後半になってある規模をもった遺跡があらわれ、農耕文化を定着せしめたと思われるが

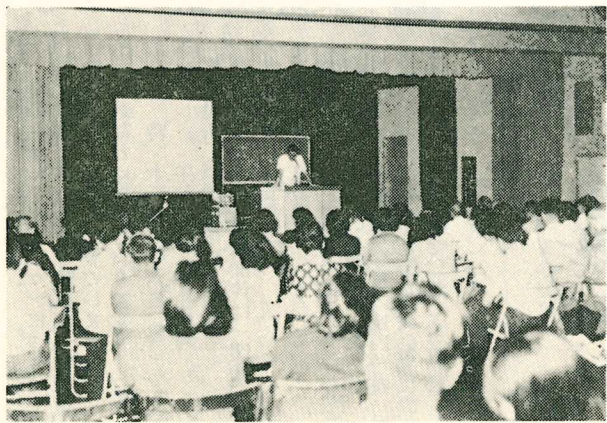
終末期土器が完形あるいは完形に近いもの二〇個以上を発見、当時の土器セットを完備するもので、豊前地方で不明であったこの期の資料を得たことは北九州地方の文化解明に大いに役立つものである。将来の研究が期待される。

安山岩や頁岩、砂岩を原料として磨製石器を生産し、高槻遺跡の石斧のごときは中期の北九州に広く流通した飯塚市立岩の石砲丁製造址、福岡市今山の石斧製造址に先んじて前期末ごろに小流通圏を形成していたようである。北九州周辺における弥生文化形成期の研究はようやくその緒についたのが現状である。最近八幡区香月地区の原遺跡、小倉区曾根高島遺跡の発掘調査を行なったが、ともに北九州市内弥生期遺跡の特色として、瀬戸内文化と九州文化の交流を証明する貴重な出土品を得たが、特に曾根高島遺跡からは弥生

終末期土器が完形あるいは完形に近いもの二〇個以上を発見、当時の土器セットを完備するもので、豊前地方で不明であったこの期の資料を得たことは北九州地方の文化解明に大いに役立つものである。将来の研究が期待される。

(宇木波田具塚、沖の島遺跡、原遺跡、高島遺跡の発掘調査と出土品等のスライドにより具体的な説明があった。)

別府大学賀川光夫教授による「縄文時代の北部九州」、九州大学岡崎敬教授による「大陸から学んだもの」は紙面の都合により割愛させていただきます。
なお当日、係の不手際からスライド映写、拡声、冷房等技術的なことに不備がありましたことをおわびします。



文化財講座会場

文化財保護強調週間に寄せて

毎年、文化の日を中心に十一月一日から七日までの一週間を「文化財保護強調週間」として、文化財の保護に関する各種の行事が行なわれています。

これは昭和二十九年十一月三日に法隆寺金堂の竣工式が行なわれたのを機に設けられたもので、文化財保護のキャンペーンを行ない、文化財に対する理解と認識を深め、文化財愛護の精神を育成することを目的としています。

そこで、本会でもこの週間にちなみ、会員のかたがたからお寄せいただきました文化財に関するご意見、所感などを特集してみました。

かけがえのない文化財

八幡区 鴻江 敏雄

八月十五日、八幡区の末松家をおとすれ同家所蔵の「蠟(ろう)しぼり木」一式を調査させていただいた。

これは、末松家にて江戸時代末より大正五、六年ころまで、原料であるはずの実より蠟を製造するために使用されていた一連の道具であり、重石(おもしろい)四基、しめ木五本、くさび(木製)四本、いり鍋一、しぼり釜一基、台木二枚などが保存されている。

この「蠟しぼり機」は、江戸時代に黒田藩の特産物の一つであったはげ蠟の製造工程を知るための貴重な民俗資料である。また、新聞報道によると(八月十九日付)

戸畑区の戸畑中央公民館の倉庫より「……文政五年年(一八二二)八月上旬……」製のつり鐘が発見されたという。

このように最近、宅地造成などによる埋蔵文化財の破かい消滅が惜しみなげかれていた反面、埋れていた遺産もポツポツながらも発見されているのはうれいしきである。

工業および商業都市である北九州市の礎(いしずえ)となつてきた既存の文化財を守るばかりでなく、われわれの身近なところに埋れている祖先の残したかけがえのない文化遺産を掘りおこし、あらためて郷土の歴史を見なおし「文化財の砂漠」の汚名を返上し、「文化遺産の宝庫」としたいものである。

文化財パトロールの悲哀

門司区 石崎 巖

数少ない郷土の文化財をパトロールしてみても、その幾つかが取り去られ失われているとき言いしれない寂しさを感じる。その二、三を述べてみると、第一が静養院である。

徳僧蘭山が二十八年間禅徒の練成に注ぎ、北豊第一の禅林として世に知られていた大里柳村の天竜山静養院の本堂、経堂、庫裏は長倉戦の直後解体撤去されていたがその後も荒廃の一途をたどり、山石で敷きつめられていた参道もくつがえされ、たださびれた堂宇と石垣の一部と諸州より集り客死した修業僧の墓石が、幾つかの石仏供食塔と共に寂しく残されているだけとなった。出雲山に眠っていた長俊の墓も長繁の墓石も、もう大里にはない。ただその霊のみはそのままと留まっているだろう。

また次に長く国の守りとして完全に保存されていた要塞に登ってみると戦後急速に破壊され、和布刈はもとより古城も笹尾砲台も全く姿を消す時は間近であろう。災害が起こらなかつたからといって保険料の支払人を責めることは筋違いである。博多の水城と比べてなんの変りはない。もし東郷がバルチック艦隊を撃ちそこねたとし



平尾台

たら必ずや門をおそつたであろう。井戸一つにしても築城技術の粋を集めて出来たものが無造作にこわされている。

この外無形文化財を考えてみると馬追跡、柳神楽は今の内に擬子入れして保存したいと思つている。また特に深く感ずることは寿永の昔、都落ちをした平家が緒方惟義に追はれて大宰府から芦屋に出、海路柳ヶ浦に引返し内裏を定めたことから発生した「大里」の地名が行政区の離合により、いとも無造作に消されてゆく現実である。せめて駅名ぐらいは元のまま大里として残す寛容さがあつてほしかった。国を失つた民族の悲痛

カストルとむらさき

小倉区 溝口 連

私の日曜日の日課が平尾台のカストルと背比べをするようになって久しい。背比べといえはちよつと変だがこの平尾台は、眼に見えない消長を何万年かの昔から、今もなお倦むことなく風化の現象に生きつづけて、あるいは群羊の如く、巨象にも似、白衣の信者の蟬集かと思まごう景観を呈しているカツレン、カストル、そしてくまなく点在する大小さまざまなドリーネ、ウパーレ、それに狭まれたコックピットの絞線、そこに天然の美が惜みなく展開され、台上に降り注いだ雨水は浸透して地下水となり、その地下水は無数の洞窟をつくり、その中奇岩怪石にまじつて生長する乳石と石筍は、万年とも億年ともいう年代を印している。ドリーネに自生するシダ科に属するもの一〇種が登録され、他では全く見られない、イワオモダカ、タチデンダ、ピロードクモノシダなど植物社会学にもっとも貴重なものがあり、草原には

五〇種以上の草々が、四季それぞれのおおいをこらし、この中にムラサキがある。

日本古来の伝統工芸の友禪染色のむらさきあのはれと赤と青の中間色の紫はこのムラサキの肥大根からさつ取され、友禪染色伝統の自然美を生かすにはなくてはならない、ムラサキも自生しているこの平尾台。この平尾台が天然記念物に指定されていることも、うべなるかなである。

近時日曜日祝日は万に近い登山者を迎え、町の人びとの憩いの場として、また学術探求の典型的要素を具備しているカルスト台地として、いちだんの認識を深め、みんなを守り、生かすつづけたいと、きょうもカルストとすきと、こぼれかけた萩の花の中をパトロールするものである。

文化セミナーに出席して

門司区 大田 章

八月二十一日から三日間、戸畑市民会館で開催されたこの行事は夜間にもかかわらず熱心な会員が大勢参加されて、誠にたのしく思った。初日は「北九州の弥生時代―農耕文化の出現期について―」二日目は「縄文時代の北部九州」最終日は「大陸から学んだもの」と言うテーマであった。

かつて、大昔の遺跡が方々で無惨に荒されたり、高松塚古墳のような貴重な文化財について、たびたび報導されて、断片的ではあるが世間一般の方々の関心も漸く高まりつつあるように思われる。郷土の歴史はいつの時代を研究しても容易な事ではないが、特に縄文、弥生、古墳文化の時代は、私にとっては誠に難解な存在であったので今回の研修は天与の好機を得て、喜んで参加させていただいた一人である。

講師の先生方には、長期間にわたり苦心の末収集された貴重な数多の資料を、スライドを使って現場を再現し、系統的にしかも平易に解説してください、遠賀川流域を中心にした北部九州が、古く縄文時代以後の遠い祖先の文化遺産の宝庫とも言うべき土地であることや、北部九州と朝鮮半島や中国大陸との文化的交流が、一衣帯水の間とは言いながら、当時の悪条件を克服して如何に密接に行なわれていたか等、詳細に例をあげてご教示ください、一同、時のたつのも忘れていたかのようであった。「むだな仕事、むだな旅行が役に立つ」、「南北朝鮮共に文化財保護調査に力を入れている」云々は、誠に意味深長な表現に感じられた。

私にはある時はバスで巡り、ある時は研修会で学び、文化財に対する認識を深めつつ、所期の目的達成に向けて一歩ずつ前進して行きたい。まずい感想の一端を申述べ、将来の企画をさらに希望してお礼の言葉にかえたい。

文化財を守る会

若松区 小原郁子

ことしの春、奈良県の明日香村で極彩色壁画、鏡、飾り金具などが発掘されたことをテレビで知った。こうした物は、むかしの人たちの生活の様式や風俗、習慣を知る手がかりとなる大切な文化財である。だから、どんなに小さい石器の一つでも、土器のかけらでも、祖先の人たちの苦勞して作った宝物である。



小田山古墳公園

わたしはずっと前、父から福岡県春田町の五郎山古墳の話聞いたことを思い出した。日本の有名な古墳のことは、図鑑などで知られているが、無名の古墳も数えきれないほどたくさんある。わたしたちの学校のすぐそばにある小田山古墳も、その一つであると思う。巨石を組み合わせて作った横穴式の石室である。約千年位前の祖先の人たちが作った物だそう。すばらしい知恵だと思ふ。むかしここで、なくなった人をとむらったのだと思うと自然と頭がさがる。今小田山古墳のすぐ近くの北渡の海は、工場が建てられるためにどんどん埋め立てられている。ひっそりとした石室と、発展する工業地帯の組み合わせは、対象的だ。

今では福岡県はまだ開けてなかった町や村も、鉄筋のアパートや新築された家などがたくさん建っている。一見、近代的に思われる建物でも、そのもとなつてはいるのはむかしの人の考え方ではないだろうか。町が、発展する一方、これからの発掘は少なくなるばかりだ。だからせつなく発掘した物場所などはあらさないと、そつとしておこななければならない。わたしたちの町にあるお寺の朝鮮鐘が、なくなっていることを父から聞いた。わたしは悲しいと思つた。この鐘も文化財の一つだった。盗った人は、こんなに大切なうちの物とは知らず、古鉄屋に売ってしまったのではないかと心配だ。わたしの家には、考古学の本がたくさんある。わたしには内容がむづかしくてまじくわからない本ばかりである。けれどもいろいろな写真には興味を持てる。うんと頑張つて一冊でも読み通したい。

盆踊りをたずねて

小倉区 姫野真由美

一週間に渡るきびしいグループの海浜合宿から帰倉した夜、リーダーの先生から「明日十三日の夜バスによる文化財めぐりに男子と女子の班長は出席せよ」と指示を受けた。バスハイクは初めてのことなので嬉しさの中にチョッピリ不安な気持ちも働いて、ほんとうに久方振りの懐しい我が家のベットのなかになかなか寝付られなかった。

盆踊りと言えば私の見聞は実に少くない。一つは生れ育った小倉区の富士見町の、いわゆる町の盆踊りだ。町内の広場に足場が組まれ赤提灯や色電球の光の華かな交差とスピーカーから流れる流行歌の下で、講習会に参加していら

した婦人会のリーダーの手振りに合わせて楽しくも騒がしい「町内のお祭り行事」なのだ。それは仏事としての本来の意味よりも小学生時代の楽しい夏休み行事の想い出として今でも心に残り手振りも忘れてはいない。(それなのにどうしてか六年生の夏を最後に、中学生になったら踊りの輪に素直にはいれなくなつてやめてしまった。)

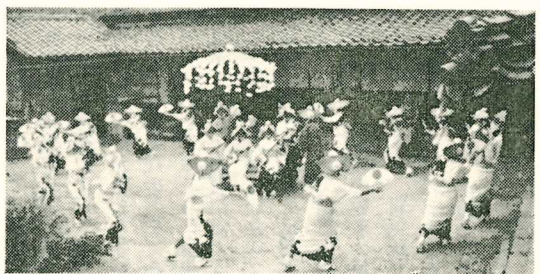
今一つは、昨年小串で見た踊りだ。グループ合宿の予定を先生にねだつて二日も延してもらつてまで見たいと思つたのは、親しくなつた小串の人たちから「山口県の文化財になつている小串踊りを見て帰られたらよかと」と強くすすめられたからだ。そしてその結果は「びっくりショックと幻滅」だった。会場の広い校庭には、ほんの数える程の裸電球がぼんやりつり下り、中央に太鼓と大きな酒樽が据えられただけで周囲は足元もわからぬ程の木の下闇。その中を異様な姿の人びとの大きな輪が砂ぼこりを上げながらのたくり、なにか大きな長い虫のように動いていた。私たち四十名全員、声も出せないで棒立になつたまま顔を見合せた。しばらくして闇になれた目に入びとの姿がはつきりしてきてまたショック。一人ひとり想像を絶する仮装行列なのだ。狂人かと思つた程手足をバタつかせ、金切声を上げて黒いスリッパ姿

の女装の青年の後にヒッピー姿のこれも男女が腕を組んでクニャリクニャリ、その後からはドンゴロス袋のオバケが、裸で石油缶をたたいて砂ぼこりを舞い上げて来るし、頬かむりで素裸のふんどし男が両手を拡げて近よつて来た時は、女子班みんな悲鳴を上げて先生の後に逃げこむさき。ダンボール箱に手足の生えた集団が通つた後から、漁網を体にまきつけた変なインディアンの一団の後は真白のオバケで、その後は黒ん坊の裸の列がエッチな踊りと掛声で通り過ぎる。中央では声をからして何か歌っているけど全然聞きわけられない。その中にケンカまで始まり「浜方と町方？」のなぐりあいまであった。「これが本当に文化財なのですか?」「どうして?」

「これが本当の文化財なのですか?」「どうして?」等々グループの質問にあつてさすがの先生もうなるばかり。若い女の人たちや子どもたちの列は、うらわを手を持ってなんとか踊らししい手振を見せてはいるが、最後の青年たちにはたづらされてキヤキヤワーワーの騒ぎで、とても見られる踊りではない。皆んなで「もう帰ろうか?」とひそひそ言っていた時「オイ、あそこの人たちを見てみる」と先生が指された。木の下の闇の中を白い浴衣姿の五、六人の人たちが手振りも静かにだんだん近づいてこられ

た。白いうらわが揃ってくるのと回り足さばきも軽く、前に後にさつさと揃つて動いて全々別の踊りに見える小さな合いの手の声だがよく透りよく揃つて美しい。目の前に来た人をよく見たら皆五十才以上のおばさんやおばあさんたちだった。手ぬぐいを頭からかぶつて、ひらひらさせている人。首にまいている人、口にくわえている人、すそをからげている人、前の方を帯にはさんでいる人。よく見ると少しづつ違う。小さな声で「これが本当の手振りだろう。よく見ておけよ」と先生が言われた。帰りはなんだか疲れてしまつて皆黙つたまま歩いた。ミーティングの時「確かな事は調べて見ないとわからんが、おそらく上方の歌舞伎踊りが流れて来て仮装踊りになつたのだろう。それが戦後? いやここ数年かもわからんなあ。くずれくずれて型も風格も失つたんだらうと思うね。町方や浜方の違い。若者と戦前派の違い。小串も過疎化現象で若者が都会に流れているから帰省者のお祭り騒ぎもあるだらう。色々のことが重なつて伝統もくずれ、見た通りのでたらめ踊りになつたんだらうな。本来はあの一群のおばさんたちの手振りのようにたおやかで、みやびなものだったらう。小串の人たちの人情の温たさは、毎年のキャンプで良く知っているだらう。そ

のの人たちでも伝統は守りにくいものになつているんだね。いちがいに小串踊りを責めることは出来ないね。考えて見ろよ。お前たちの町内の盆踊りなんて実は盆踊りなんでものじゃないよね。とつこのむかしに伝統なんて失つているものね。地域の住民意識も六階建のアパートなんか建ちだすと、とたんに変化するからね。やりにくい



野面の盆踊り

よ。そんな中で、もし守り通しているものがあるとしたら本当にその人たちの努力はすさまじいものだと思うよ。小串踊りもあんなっちゃう、ちよつとやそつとでは復元は出来まい。淋しいことだがあのおばさんたちで終わりだらうね。」と言われた。ことしのキャンプでは、延期まで願つて小串踊

りを見ようとは、もう誰も言い出さなかった。戸畑駅前から乗ったバスの中でふつと不安に似たものが心の中を走つた。配布して載いた資料のパンフレットを見ながら、いつの間にか小串踊りを思い出していたのだ。しかしそれは私の取越し苦勞と言ふものだった。天籟寺盆踊りについて説明役を引受けてくださった安田さんの、中年婦人らしい落着いたもの静かなお言葉と、キラキラ光る情熱的な目についてまにか引きつけられていた。保存会の人たちの飾らない素朴な手さばきと、内容まではよく聞きとれなかつたけれど、歌い継いで行かれた人たち。とりわけお年を取られた方々の枯れた声と節回しの見事に感心した。その古い型を出来るだけくずさず、掘り越し、次の世代に残そうと復元作業を続けられて来た保存会の方々の努力に、頭が下る思いでした。お別れするとき、制服姿の私に「私も西高でしたの」と言われた。そのひとはずつしりと重く私の胸に落ちて、新しい感動にゆすぶられた。大先輩だったのだ。文化財を守るためにひたむきに戦い続けて来たその人は、静かに暮れなすむ高台の踊り櫓を背に立って私たちのバスを見送つてくださった。私はこの大先輩から何か